

学会だより

JDDW2017 第 94 回 日本消化器内視鏡学会総会

乾 和郎

(藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院消化器内科)

第94回日本消化器内視鏡学会総会が2017年10月12日(木)～15日(日)にJDDW2017の一環として福岡で開催され、金沢医科大学消化器内視鏡学教授の伊藤 透先生が会長を務められた。

伊藤会長は「万里一空」という、宮本武蔵が五輪書のなかで説いた「世界はすべて同じ空の下にあり、どこまで行っても同じ世界だと、冷静に物事をとらえる」といった精神的境地をテーマとして掲げられ、サブテーマとして、「消化器内視鏡の原点回帰そして革新と伝統」を挙げられた。会長講演はご自身の家業が代々医師であったという家系図(現在は第11代目)から始まり、金沢医科大学に内視鏡学講座をもう一人の講師の先生と二人だけで立ち上げてからの苦難の道と目標に向かっての並々ならぬ努力の結果、現在行われている研究が開花するまでの歴史、といった内容で、挙げられたテーマを理解するとともに伊藤会長の内視鏡学に対する熱い思いを感じながら講演を拝聴した。

JDDW のなかで日本消化器内視鏡学会が主体として設定した主題は、シンポジウム4題、パネルディスカッション1題、ワークショップ8題であった。また、日本消化器内視鏡学会が進めている国際交流に対応して、インターナショナルシンポジウム「バレット腺癌の診断と治療」とパネルディスカッション「colitic cancer の内視鏡診断の現状と展望」が開催された。どの会場も多

くの参加者で埋められており、素晴らしい発表と活発な討議が行われていた。

私自身は、3日目の午前中、北里大学の木田光広先生と、日本消化器内視鏡学会が3年前から学会における学術発表の継続性を重視した企画であるコアセッション「Innovative therapeutic endoscopy: 腓膵性嚢胞・感染性 WON に対する内視鏡的治療」の司会を担当した。このコアセッションは、前回総会時の司会者のうち1人が、前回のまとめを基調講演として発表することから始まり、その後、今回のテーマに沿って11人の演者が演題発表を行った。広い会場にもかかわらず席が埋まり、多くの方が聴衆され、会場からの討論も活発に行われた。約30分間の総合討論でも、とくに急性膵炎後に伴う感染性 WON に対する内視鏡的治療の現状と問題点が、各演者それぞれの立場から議論され、ワークショップとして有意義な内容であったと自負している。

JDDW2017では、全体を通じての参加者はおおよそ2万人であったとのことである。私も来年のJDDW2018で第96回日本消化器内視鏡学会総会を担当させていただくので、主題テーマを選ぶうえでの難しさを理解しているが、今回のJDDWは各学会間の協調がうまくなされており、参加された会員にとってきわめて有意義な学会であったと思われた。来年もぜひ神戸のJDDW2018に演題応募していただきたい。